

メモリスの 哄笑天

小森健太朗



ネメシ
哄笑天
小森健

●著者紹介

小森健太郎（こもり・けんたろう）
一九六五年、大阪に生れる。82年、史上最年少の16才で、処女作『ローウェル城の密室』（後に改稿して出版芸術社より刊行）が、第28回江戸川乱歩賞最終候補作となる。86年冬よりコミケットに参加、幻想・推理文学サークル「それぞれの季節」を主宰する。89年、東京大学文学部哲学科を卒業。現在、同大学教育学研究科博士課程に在籍中。
94年、『コミケ殺人事件』（出版芸術社刊）でミステリ作家としてデビュー。その後、『ローウェル城の密室』（出版芸術社刊、処女作を改稿したもの）、『ネヌウェンラーの密室』（講談社ノベルス）を発表、異色の書き手として注目を集めている。

翻訳書に、ミハイル・ナイーミ『ミルタッドの書』、カール・ジブラン『漂泊者』（共訳）（いずれも壮神社刊）がある。

ネメシスの哄笑

発行日 平成八年九月二十日 第一刷

著者 小森健太郎

発行者 原田 裕

発行所 株式会社 出版芸術社

東京都文京区音羽一〇一四 池田ビル

郵便番号 一一二

電話 東京〇三―三九四四―六二五〇

FAX 東京〇三―三九四四―七四六〇

振替 〇〇―一七〇―四―五四六九一七

印刷所 慶昌堂印刷株式会社
近代美術株式会社

製本所 大口製本印刷株式会社

落丁本・乱丁本は、送料小社負担にてお取替いたします。
©小森健太郎 一九九六 Printed in Japan

ネメシスの哄笑

登場人物

溝畑康史	出版芸術社の編集者
若北かすみ	出版芸術社の編集者
小森健太朗	ミステリ作家
鉢塚 綴	ミステリ評論家
直江久信	ミステリ評論家
原田 裕	出版芸術社社長
黄泉路爆運	『ネメシスの哄笑』の作者
小田和誠	サークル「オフショット」主宰者
樹泉鈴江	黄泉路爆運の郵便物受取人

装幀——北見 隆

以上にもわたって私はかねがね疑問におもつてきた。

なぜ鉢塚綴が「や行」で始まる作家について書かないのか。

鉢塚綴といえ、著名な推理小説評論家である。

二十年以上にもわたって推理小説評論の第一線で活躍し、その評論書は十冊を数え、四年前には評論部門で文芸賞を受賞したこともある、斯界の重鎮だ。

推理小説の蒐集家としても名高く、彼のコレクションは、日本でも指折りであろう。

かつて探偵小説専門誌『幻影城』をてがけていた島崎博は、探偵小説の収書が日本一といわれていたが、『幻影城』が廃刊となり会社が倒産したときに、膨大な島崎コレクションも散逸の憂き目にあった。その島崎コレクションなき後、推理小説の最大の収書家は現在、おそらく鉢塚綴か、そうでなければもう一人の有名評論家、直江久信のどちらかであろうというところで衆目の意見は一致していた。

私は、推理小説の出版をてがける仕事をしている商売柄、鉢塚綴の評論書や、編纂本の類はほとんど目を通して、最近妙なことに気がついた。

それは、彼が「や行」で始まる作家については、どういふわけか語ったり触れたりすることを

避けていることである。

一番それが如実に表れているのは、最近彼の著した『日本探偵作家総覧』という本だ。そこで鉢塚綴は、主だった日本の推理作家を全般的に取り上げているのに、なぜか苗字が「や行」で始まる「山下」だとか「吉村」という苗字の作家を取り上げるのを避けている。どうしても取り上げざるをえない「横溝正史」のようなビッグネームは、さすがに落ちていないが、驚いたことに「横溝正史」の項目は、彼本人が書かずに、別の評論家に代筆させているのである。

もう一つ、日本の著名な探偵作家との対談やインタビューをまとめた鉢塚の本がある。これもどういうわけか、「や行」で始まる作家だけは、まったく出てこないのである。

はつきりとその傾向が現れているのは、その二つの本だけだが、単行本になっていない雑誌連載のコラムなども、よく観察してみると、明らかに同じような特徴がみてとれる。

今度わが社で刊行する予定の本のために、鉢塚綴の本を何冊か読み返しているうちに、この特徴に気がついた私は、彼が書いた古い評論書にまで遡って調べてみた。そしてその結果、最近の若手作家に関しては「や行」の字で始まる作家も取り上げられているものの、ひと昔前の作家に関するかぎり、極端にその三文字で始まる作家だけ触れるのを回避していることが、はつきりとわかってきた。もちろん他の作家と比較したり対照したりする中で横溝正史などに触れざるをえない場合もあるから、百パーセント「や行」で始まる作家が避けられているわけではないが、しかし、比べてみてその取り上げ方の不公平さは歴然としている。

まわりを見回してみても、私以外にこのことに気づいた人はいないようだが、それはたぶん私のように熱心に、昔の評論書を読む人があまりいないせいだろう。こんなことは、細かいところ

まで綿密に読む人でないと、まず見落としてしまうだろう。

今日これから、鉢塚綴と会う際には、絶対にこの点を問いつめてやろう。鉢塚宅に向かう道すがら、私はそんなことを考えていた。

Ⅱ

1996年9月17日、火曜日。

私とその日鉢塚宅を訪ねたのは、いまうちの出版社で頼んでいる仕事の打ち合わせのためである。

わが出版芸術社では、戦前の探偵作家の写真やプロフィールを集めた『新青年の時代』というグラフィック本の刊行を企画している。戦前の貴重な写真や稀^{きこう}購本など、さまざまな資料を用いた本づくりになるので、当然、その資料提供と内容紹介の文章を、その方面の第一人者である鉢塚綴に頼んでいた。もう一人、直江久信にも原稿執筆と資料の提供を依頼しているので、その本は基本的に、鉢塚綴と直江久信の共編著という体裁をとる予定になっていた。その本が刊行されて売行きが良好なら、戦後作家篇の『宝石の時代』も続編として刊行する予定になっていた。

その日は、鉢塚宅で、彼の所蔵している写真などの資料を見て、どれを使うか、取捨選択を話し合うことになっていた。

鉢塚宅は、横浜市港北区の閑静な住宅街の中にあるマンションの一室である。数万冊にのぼる膨大な蔵書をかかえる彼が、そこをすまいに選んだのは、都心に近いという地の利に加えて、そのマンションが本の重みに耐えられるだけの頑丈なつくりになっているためであるらしい。聞いたところでは、そのマンションは耐震用の特殊な設計になっていて、普通のマンションよりも数倍頑丈にできているそうだ。

彼のすまいの最寄りの駅は、JR横浜線と東急東横線が交錯する菊名駅である。

その駅で私は、出版芸術社の同僚の女性編集者、若北かすみと、うちの出版社に小説を書いてもらっている作家の小森健太郎と待ち合わせをしていた。

若北は、今年大学を卒業してうちの会社に入社したばかりの新人編集者である。四年制の大学を卒業した後、アメリカの大学に留学していたので、年齢は26歳だそうである。実家は、私と同じく神奈川県にあるそうだが、今は東京に出て一人暮らしをしているらしい。

うちの社で彼女がやらされているのは、まだ見習い段階の仕事が多く、私がやっている仕事の補佐役をやってもらう場合が多い。彼女は、推理小説、SF、伝奇小説、時代小説等、エンターテインメント小説全般に、私ほどではないにしても、豊富な素養をもち、よく気のまわる頭のよい子なので、じきにもっとたくさんの仕事を任されるようになるだろう。うちの会社も、なかなかよい人を採用したものであると私は、社長の選抜眼に敬意を払っていた。

彼女は編集者として有能な素質をもっているだけでなく、目鼻立ちのぱっちりしたなかなか美しい女性である。私がちよっと探りをいれてみたところ、特定の彼氏とかは現在のところいなさそうな様子なので、自分で口説きおとせないだろうか、とちよっと期待しているところである。

さりげなくデートのお誘いを何度かしてみたが、今のところあまり色よい返事はもらえていない。しかし、まだ本格的な攻勢はかけたというほどではない。まあ狭いオフィスでいつも顔をあわせていることだし、チャンスはこれからまだまだあるだろうから、焦る必要もないだろう。私はそんな風に考えていた。

二階にある駅の改札にきてみると、まだ彼女の姿はなかったが、小森健太郎は既にきていた。小森は、まだそれほど名をあげていない作家で、むかし「高沢のりこ」という女性名義で投稿した作品が一度だけ江戸川乱歩賞の最終候補作に選ばれたことがある。それが16歳のときだったので、乱歩賞史上、候補作としては最年少の記録保持者ということになっている。その応募原稿を改稿したものを同人誌として自費出版していたものを、私がたまたまコミックマーケットという同人誌即売会でみつけた。読んでみるとなかなか面白いスラップスティックのミステリだった（私がそう評すると彼は「これは本格ものである」と言って抗議していたが）ので、うちの出版社で小説を書きませんか、と声をかけてみたのが、小森とつながりができた、そもそののきっかけである。そういうわけで彼の最初の書き下ろし作品『コミケ殺人事件』が一昨年の11月にわが出版芸術社から刊行され、つづいて去年の9月には、昔の乱歩賞最終候補作を改稿した『ローウェル城の密室』が刊行された。その二作は大いに売れたというほどではないが、それなりに一部の読者には受けたようで、他の出版社でも小森に目をつける編集者が出たらしい。講談社から引きがあって、小森は今年の一月に三冊めの著書として『ネヌウェンラーの密室』という、エジプトを舞台にした本格推理小説を講談社ノベルスから刊行した。わが社でも、次の書き下ろし作品を彼に頼んでいるところである。

彼は割に整った顔立ちをしているが、どこかぼうつとしていて、外からみて何を考えているのかさっぱりわからない。その一種独特の風貌は、人ごみの中にまぎれていても、すぐに眼についてしまうようなところがある。

改札の外を所在なげにうろろしていた彼は、私をみとめるなり、

「あれ、溝畑さん。今日ははいですね、珍しい」と言った。

「はいってちやうど約束した時間じゃないか」

私はそう反論した。

「だから、珍しく時間どおりに来ましたねってことですよ」

そう言われて私はちよつと慥然とした。

たしかに、何度か彼との約束の時間に大幅に後れたり、急用がはいって待ち合わせに行けなかったことはある。原田社長にも何度か、約束の時刻に遅れたせいで叱られたこともある。しかし、わざわざこんな場所で彼に皮肉を言われるいわれはない。

皮肉を言われたお返しに私は、

「ところで、小森さん、書き下ろし作品の進み具合はどうですか？」とききかえした。

そう言われても彼は一向に動じた様子を見せず、ぼさぼさの髪の毛を撫でながら、

「いやーっ、ぼちぼちってところかな」と言つて曖昧な笑みを浮かべた。

出版芸術社の応接間で、次の書き下ろしの構想を原田社長から聞かれて小森が喋ったところでは、今度は東京大学教養学部のある駒場を舞台にしたミステリを書く心づもりがあるとのことであつた。駒場を舞台にしたミステリというと、古いところでは、先頃なくなった高木彬光の『わ

Ⅰ
が「高時代の犯罪」という古典名作があるし、普通の文学作品でも柴田翔の『されどわれらが日々』や『贈る言葉』などがある。しかし、小森の独特の感性をもってすれば、そういった先行作品とはひと味もふた味も違う、ユニークなミステリができてあがるのではないかと、私も原田社長も期待しているところなのである。

彼の話してくれたあらすじによれば、真相が謎に包まれたままの一高時代に起こった殺人事件をそっくりなぞったような殺人事件が、現代の東大駒場で起きるそうである。駒場寮をはじめとして、銀杏並木や一二郎池、一号館時計塔とそこから寮にのびる地下通路、坐禅道場である三味堂など、東大教養学部の数地内で事件は展開するそうである。しかし、小森の話しぶりから、本当に話がどの程度かたまっていくか、つかみづらいところがある。

最初の約束では今年の二月くらいにはその原稿をもらえなくてはだっただのに、それから半年以上も過ぎた九月の今日になっても、いまだに原稿はもらえていない。何度か催促したが、「もうすぐできる」と繰り返し返すばかりで、一向に話が進展している様子がない。本当にちゃんと原稿を書いているのであろうか——そろそろ疑わしくなってきたところである。

井上夢人の著した『岡嶋二人盛衰記・おかしな二人』によれば、岡嶋二人の一人の徳山諄一は、編集者に対して出来てもない小説の構想を話すという、でまかせのその場ののぎを得意としていたそうであるから、あるいは小森も私に、まだ何も固まっていない話を、でまかせで言っているだけかもしれない。そのところは、私にはなんとも判別がつかなかった。

今日小森がここに来たのは、先週の打ち合わせ（という名目で麻雀をしていたのだが）の際に、私が今日鉢塚綴宅を訪ねる予定であることを話すと、自分も鉢塚綴に会いたい、その膨大な

コレクションを実際に見てみたい、という申し出を小森から受けたからである。鉢塚に聞いてみたところ、小森を連れてきても構わないということだったので、今日は駅で待ち合わせて一緒に行こうということになったのである。

東横線の菊名の駅は、線路の上にまたがる階上に改札口があり、そこから左右二手に通路が分かれている。右手が北口、左手が南口の出口へと階段が通じているのだが、鉢塚綴の住むマンションは、北口を出てしばらく北上したところにある。

「今日、他に来る人がいるの？」

小森がそう訊いてきたので、私は頷いた。

「ええ。もう一人、うちの会社の若北さんが来るはずですよ」

「ああ、かすみちゃんか。あの可愛い女の子ね」

小森も、以前うちの会社に来たときに、若北に会ったことがある。小森も、彼女がいたく気に入ったらしく、時々打ち合わせで会うときも、よく彼女がどうしているかなどと口走るようになった。うちの会社の編集者に好感をもってくれるのはよいが、それが一線以上の好意に発展したりすると、社としても私としても大いに困るところである。

彼女を呼ぶにしても、若北さん、と言うべきではないだろうか。へかすみちゃんなどというなれなれしい言い方では、互いに非常に親密な関係であるかのような誤解を産むおそれがある。

私は、彼の言い方にちよつとむつとした。

見たところ小森はもう結構いい歳なのに、彼女もいなさそうだから、若北に手を出そうなどと邪念を起こさなければよいが、などと内心ひやひやしていると、ようやく、改札の方から、

「ごめんなさいーっ。遅くなっちゃって」との言葉とともに、若北かすみが駆けてきた。

髪を青いリボンでくくり、水色のチェックのシャツとジーンというラフな恰好だ。大所帯でないうちの会社では、ラフな恰好がまかり通っていたから、彼女のファッションとしてはいつものおりのものと言ってよかった。

彼女が来たのは、指定の待ち合わせ時刻には約15分の遅刻である。これまでの実績からみて、どうやら彼女も、私以上に時間にはアバウトな人間らしい。しかし、ここは同じ会社の先輩として注意を与えておくべきだと心得て、私は、

「若北さん、だめでしょう、ちゃんと時刻どおりに来なくっちゃ」と言った。「今日は小森先生も来てるんだし、鉢塚先生も待たせることになるんだよ」

「ごめんなさい」

そう言って彼女はぴょこんと頭を下げた。

「ああ、いいよ、いいよ、かすみちゃん、気にしなくて」

甘ったるい猫なで声で小森がそう言った。またしてもへかすみちゃんである。私はその言い方が癪にさわった。

「ごめんなさい、小森先生」

その言い方が妙に心が籠もっているような気がして、私は不安になった。もしかして、彼女は小森の野郎に気があるのではないか——そういう不安が高まってくる。

小森は、私の方を向いて、

「溝畑さん。鉢塚さんのところは、こっちですか？」と訊いてきた。

「こっちですよ」

そっけない声でそう言って、私は先導役として歩き始めた。

二人とも鉢塚の住まいを訪ねたことはないの、道を知っている私が案内役となる。先頭に立つて駅の階段を下り、鉢塚の住むマンションのある住宅街へと道路を北上し始めた。

小森と若北は、並んで私の後について歩きながら楽しそうにお喋りをしている。

「最近、なにか面白いミステリとか読んだ？」

脳天気な声で小森がそう訊くと、若北は、

「最近はやっぱ京極夏彦さんですよー」などと言っている。

「あ、京極夏彦！ 実はぼくもそうなんだ。うーん、やっぱ、最近のイチ押し作家だよね」

なにが最近のイチ押し作家だ。内心むかむかしながら、私は黙って先頭を歩き続けた。十分ほど歩いて、鉢塚の住むマンションの前にまで来た。赤い煉瓦塀に囲まれた中に、エスプワール菊名という名の、十階建ての白い瀟洒な建物がたっている。そのマンションの二階が鉢塚綴の住居だ。

私は立ち止まって二人の方を向き、

「これから鉢塚さんのお宅にお邪魔するから、その覚悟はいいですか」と言った。

「覚悟って、どういうことですか？」若北がそう問い返す。

「つまりだね、本の量を覚悟するってことだよ」

「鉢塚さんって、本をいっぱいもっている人ですよ、それは聞いています。でも、覚悟するって、どういうことですか？」

「覚悟するくらいのものであるってことですか？」と小森も訊く。

「まあそういうことさ」

きょとんとした表情で小森と若北は顔を見合わせていた。二人とも、鉢塚の住む部屋の状況がよくのみこめていないらしい。

見て驚くなよ……そう思いながら、私たち三人は二階への階段をのぼった。

Ⅲ

二階にきて廊下を進むと、先に立っていた若北が「鉢塚」と書いた表札を発見した。

「あ、ここですね」

私は頷き、若北はベルを鳴らした。

その扉は、上方に小さな覗き窓がつき、下方に新聞と手紙入れがついている。この手のマンシヨンにはよくあるタイプの扉だ。

しばらくして、インターホンから「どうぞ」という無機質な声が響いてきた。

「お邪魔します」

元氣よくそう言つて彼女は、ノブをまわし、戸を開けた。

「あ！」と私は声をあげた。「そんな無造作に戸を開けちゃ——！」

しかし手遅れだった。

私が言うより早く、彼女は扉を引き開けていた。

その途端、雪崩のように彼女のところにバサバサと本が倒れかかっていた。

玄関のたたきところに、彼女の身長と同じくらいの高さに積み上げてあった本の束が、土砂崩れを起こして、彼女の方に倒れかかってきたのだ。

「きゃー」

そう言いながら若北は転倒し、その上にドサドサと本の山がふりかかってくる。

「かすみちゃん！」

「若北さん！」

あわてて私たち二人が彼女を助け起こしに駆け寄る。

崩壊した本の山は、廊下一面にちらばった。

「なんじゃ、山を崩しおって」

部屋の奥から不機嫌そうな声が響いてくる。

部屋の中は、見渡すかぎり、一面びっしりと本の山だ。

人の通る空間さえなさそうなその光景を見て、上半身を起こした若北も、小森も一瞬言葉を失っている様子である。

「なんですかぁー、これはー」

本の山を払いのけながら若北がなさけなさそうな声を出した。

「溝畑くん、君はその客人たちに、本の扱いかたも教えとらんのかね？」